

シャベルとスコップ

染谷裕子

1. はじめに

日本語の中の和語や漢語が歴史的変遷をたどるように、漢語以外の外来語もまた——その歴史こそ短いが——うつりかわっていく。たとえば、「ファスナー (fastener)」と「ジッパー (zipper)」または「ネッカチーフ (neckerchief)」と「スカーフ (scarf)」は同じ英語起源の語であるが、若者たちの間では片方 (ファスナーとスカーフ) が主流となり片方 (ジッパーとネッカチーフ) は消えつつある。また、その原語がポルトガル語である「カルタ (carta)」, 英語である「カード (card)」, フランス語である「アラカルト (à la carte)」の「カルト」, ドイツ語である「カルテ (karte)」は、本来は同じ意味を表す語であるが、日本語としては異なる意味の語として認識されている。

さて、ここ数年日本語の演習で類義語の研究を扱ってきたが、その中で学生たちと意見交換するうちに、気になる二語が浮かび上がってきた。シャベルとスコップという語である。ともに外来語であることはいうまでもないが、「ファスナー」などのように、どちらかが消え行くでもなく、また「カード」のように、どちらかが特殊な意味で使われるとは必ずしもいえない。そこで、本稿では、この二語について現状を報告し、その問題点を指摘していくことにする。なお、国語史的な面に関して触れないわけにはいかないが、今回はその問題点を指摘するにとどめ、文化史的な面を含め詳しい考察は又の機会に譲ることを最初に断っておく。

2. 国語辞典における「シャベル」と「スコップ」

2.1 現代の国語辞典等の記述

現代の国語辞典ではこの二語についてどのように記述しているか。その見解は統一がとれているか、あるいは「ゆれ」が見られるか。

まず a から q に「シャベル」の項目についての記述をあげる。(品詞名などは省略してある。)

- a 《シャヴェル・シャヴル・ショベル》土・砂などをすくったり、穴を掘ったりするための道具。(小学館『日本国語大辞典』)
- b 砂・砂利・粘土など軟らかい土質を掘削し、すくうのに用いる道具。匙形鉄製で、木柄をつけたもの。シャブル。ショベル。スコップ。(岩波書店『広辞苑』第4版)
- c 土砂などをすくうのに使う(先のとがった)さじ状の道具。スコップ、ショベルとも。(三省堂『広辞林』第6版)
- d 土・砂などを、掘りおこしたりすくったりするさじ形の道具。ショベル。(『学研国語大辞典』)
- e 土砂をすくったり、穴を掘ったりするのに使う道具。ショベル。スコップ。(『角川国語大辞典』第3版)
- f 土・砂などをすくい、穴を掘る用具。スコップ。ショベル。(講談社『日本語大辞典』)
- g 土砂をすくったり、穴を掘ったりするのに使う匙(さじ)形の道具。ショベル。スコップ。(『岩波国語辞典』第4版)
- h 《ショベル》土・砂をすくったり、穴を掘ったりするための道具。(小学館『現代国語例解辞典』)
- i ①土・砂などをすくったりするのに使う道具。②⇒スコップ ③⇒ショベル(『三省堂国語辞典』第4版)
- j 土砂をすくったり、穴を掘ったりする道具。スコップ。ショベル。(永岡書店『実用国語辞典』)
- k 土砂や雪をすくったり、穴を掘ったりするのに用いる道具。ショベル。→スコップ(『集英社国語辞典』)
- l 土砂を掘る道具。ショベル。(『常用国語辞典』)
- m 土・砂をすくったり、穴を掘ったりするスプーン形の道具。スコップ。(小学館『新解国語辞典』)
- n =ショベル 土砂をすくったり、穴を掘る道具。スコップ。(小学館『新選国語辞典』第6版)
- o 土・砂などを掘りすくうのに使う道具。ショベル。スコップ。(『新潮現代国語辞典』)
- p 土・砂を掘りすくうのに使う道具。ショベル。スコップ。(『新潮国語辞典 現代語・古語』改定版)
- q 土砂や石炭などをすくったり穴を掘ったりするのに使う道具。[スコップ

と同義にも用いられる] (『新明解国語辞典』第4版)

おおむね記述は一致している。すなわち、「シャベル」とは「土・砂・石炭・雪などをすくったり、穴を掘ったりする道具」である。ただし、記述の中に「シャベル」の言い換えとして「ショベル」または「スコップ」をあげているかどうかには若干の相違が見られる。「ショベル」はほとんどの辞書であげているが、a, d, h, k, lの五つの辞典では「スコップ」を言い換えとしてあげていない。また『三省堂国語辞典』では、「スコップ」と同義に用いられる場合を②に示している。記述の仕方は異なるが『新明解国語辞典』も同様の立場である。これらのことは、「シャベル」と「スコップ」の意味領域が異なることを示唆しているといえるのではないか。

表1 「シャベル」の言い換え

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
ショベル	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○		○	○	○	
スコップ		○	○		○	○	○		△	○			○	○	○	○	△

一方、「スコップ」の記述はどうであろうか。「シャベル」の場合と同様に国語辞典の記述をあげてみる。

- a 小型のシャベル。(『日本国語大辞典』)
- b ①粉・土砂などをすくいあげ、また混和するのに使う匙形すきの鋤。シャベル。掬すくい鋤。②(機)ボイラーに石炭を投入する時の一掬すくいの量。(岩波書店『広辞苑』第4版)
- c 《オランダschop 小型のシャベル》①シャベル。②園芸用の移植ごて。(三省堂『広辞林』第6版)
- d (柄の短い)シャベル。石炭・土砂などをすくい、また、草花の植えかえや、子どもの砂遊びなどに使われる。(『学研国語大辞典』)
- e さじ形で、柄の長い大型のシャベル。(『角川国語大辞典』)
- f ①シャベルに似て小さく、先が平らなもの。土堀りや粉状の物をすくったり、混ぜたりするために使うさじ形の器具。②園芸用の移植ごて。(講談社『日本語大辞典』)
- g ①柄の短い小型のシャベル。②シャベル。(『岩波国語辞典』第4版)
- h 小型のシャベル。また、単にシャベル。(『小学館『現代国語例解辞典』)

- i ①園芸などに使う、片手に持って土をほる道具。移植ごて。シャベル。②
⇒①シャベル① (『三省堂国語辞典』第4版)
- j シャベル。特に柄の短い小型のシャベル。(永岡書店『実用国語辞典』)
- k 小型のシャベル。(『集英社国語辞典』)
- l 小型のシャベル。(『常用国語辞典』)
- m シャベル。(小学館『新解国語辞典』)
- n シャベル。(小学館『新選国語辞典』)
- o さじ形の、土などを掘る器具。シャベル。(『新潮現代国語辞典』)
- p さじ形の、土などを掘る器具。シャベル。(『新潮国語辞典 現代語・古語』)
- q 柄の短い、シャベル形の器具。[シャベルと同義にも用いられる] (『新明解国語辞典』第4版)

すべての辞書の記述に必ず「シャベル」の語があり、「スコップ」は「シャベル」の一種であるという点で共通している。ただし、全くシャベルと同じとみなすものと、特殊なシャベルとして記述する場合がある。「シャベル」には見られなかった「スコップ」の記述として、その形が「小型(小さい等)」で「柄が短い」とあり、その用途として「園芸(草花の植えかえ等)」や「子供の砂遊び」とある。「(物を)まぜる」とか「片手に持つ」「先が平ら」なども「シャベル」には見られなかった記述である¹⁾。

表2 「スコップ」の特色-国語辞典の場合

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
小型	○				×	○	○	○		○	○	○					
柄が短い				○	×		○			○							○
園芸用			○	○		○			○								
砂遊び			○														

さらに外来語辞典の類でスコップを見ると次のとおりである。

- r 土や砂などを混ぜたり、すくったりする長さ1mほどのさじ状の道具。
(三省堂『コンサイス外来語辞典・第2版』)
- s ①すくい鍬(ぐわ)。土や砂などを混ぜたり、すくったりするさじ状の道具。スコとも。②ボイラーに石炭を投入する際の1すくいの量。(三省堂『コンサイス外来語辞典・第4版』)
- t ①粉・砂・塊などをすくいあげたり、まぜたりする鉄製のさじ。②石

炭・土砂などをすくいあげる道具。シャベル。《原語ではシャベルの意》
 (楳垣実編『増補外来語辞典』昭61・東京堂)

- u 小型のシャベル。(石綿敏雄編『基本外来語辞典』平2・東京堂)
- v 小型のシャベル。人夫、労務者間ではスコとも略す。(あらかわそうべえ著『外来語辞典・第2版』角川書店)
- w 土砂などを掘るのに使うさじ状の道具。小型のものが多い。シャベル・ショベルともいう。(集英社『日本語になった 外国語辞典・第2版』)

外来語辞典では、もっぱら「小型」「さじ形」に記述が集まる²⁾。ちなみに日本語を学ぶ外国人のために作られた外来語辞典によれば、「スコップ」は英語で「trowel (for gardening)」と記されている。(プレム・モトワニ著『日常外来語用法辞典』平3・丸善)

さらに、類義語辞典の類でこの二語をとりあげている『類語国語辞典・第3版』(角川書店)には次のようにある。

シャベル「——で庭木を植える」

- ・土砂を掘ったりすくったりするのに使う道具。ショベル。

スコップ「——で穴を掘る」

- ・園芸などに使うシャベルの柄の短いもの。

なお、vのあらかわ氏の『外来語辞典』には、佐藤弘人の『はだか随筆』(1954)より次のような引用がある。

「スコップとシャベルは、どこが、どちらがうのか。スコップは形が小さく、すくう所の形に円味があって足でふめないようになっているが、シャベルは形が大きく、肩が直線的で、足でふめるようになっている」

この二語については、すでに文化庁の『言葉に関する問答集14』(「ことば」シリーズ29・昭63)でとりあげられた。特に記述はないが、二語に対する誤解または二語間の意味のゆれが存在することが予想される。その説明は「シャベルは、砂・砂利・粘土・雪・石炭などを掘りおこしたりすくったりする道具で、足をかけることができる」とあり、「スコップは、砂・粉・塊などをすくいあげたり、まぜたりする鉄製のさじである」とある。

以上をまとめてみると、スコップとシャベルはともに土などをすくう道具として同義で用いられることもあるが、スコップは小型としての特色が濃厚で、一方シャベルは、国語辞典の類では特に記述はないが³⁾、どちらかという大型ゆえの特色を持つ道具ということになる。この見解はおおむねどの辞

書も一致しているといってよい。

2.2 アンケート調査

さて、この二語について本学の学生を対象に次のようなアンケートを実施した。

(対象とした学生は2年生77名, 1年生84名。氏名および出身地を記名してもらった。)

「シャベル」と「スコップ」について次の質問に答えて下さい。

質問1 あなたは「シャベル」と「スコップ」という道具を知っていますか。

- ア 両方知っている イ 「シャベル」を知らない
ウ 「スコップ」を知らない

質問2

2-1 あなたは「シャベル」と「スコップ」という呼び方を使いますか。

- ア 両方使う イ 「シャベル」を使うが、「スコップ」は使わない
ウ 「スコップ」は使うが、「シャベル」は使わない。

2-2 イまたはウと答えた人は理由を書いて下さい。

質問3 あなたは「シャベル」と「スコップ」という呼び方のどちらを先に覚え
ましたか

- ア シャベル イ スコップ ウ わからない

質問4 あなたは「シャベル」と「スコップ」という呼び方を区別しています
か。

- ア 区別していない(質問5へ)
イ 区別している(質問6へ)

質問5 「区別していない」のはなぜですか。

- ア 両方同じものだから イ 「シャベル」は「スコップ」の一部だから
ウ 「スコップ」は「シャベル」の一部だから

質問6 「シャベル」と「スコップ」について、次の各質問に答えて下さい。

6-1 大小について

- ア 「シャベル」が大きくて「スコップ」は小さい
イ 「スコップ」が大きくて「シャベル」が小さい
ウ どちらともいえない

6-2 柄の長短について

- ア 「シャベル」が長くて「スコップ」は短い
 イ 「スコップ」が長くて「シャベル」が短い
 ウ どちらともいえない

6-3 丸みがあるか、角ばっているか

- ア 「シャベル」が丸みがあって「スコップ」は角ばっている
 イ 「スコップ」が丸みがあって「シャベル」は角ばっている
 ウ どちらともいえない

6-4 材質について

- ア 「シャベル」は鉄製、「スコップ」はプラスチック製
 イ 「スコップ」は鉄製、「シャベル」はプラスチック製
 ウ どちらともいえない

6-5 使い方について

- ア 「シャベル」は足をかけて使い、「スコップ」は手で持って使う
 イ 「スコップ」は足をかけて使い、「シャベル」は手で持って使う
 ウ 特に違いはない エ その他（ ）

6-6 次のような時はどちらを使いますか。

- | | | |
|-------------|-------------|--------|
| ① 犬のフンをとる | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |
| ② さつまいもを掘る | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |
| ③ 子供が砂遊びをする | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |
| ④ 花壇の手入れをする | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |
| ⑤ 雪かきをする | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |
| ⑥ 工事現場で穴を掘る | ア シャベル | イ スコップ |
| | ウ どちらともいえない | |

6-7 「シャベル」と「スコップ」について上記以外に何か区別している点があったら書いて下さい。

質問7 「シャベル」と「スコップ」の違いがわかるように簡単な絵で示して下さい。

アンケートの集計結果を次の表3に示す。上段が1年84名中の、下段が2年77名中の数を表している。

表3 アンケートの集計結果

	ア	イ	ウ	エ	オ	回答なし3
質問1	83	0	1	*	*	
	77	0	0	*	*	
質問2	74	9	0	*	*	
	72	5	0	*	*	
質問3	43	9	22	*	*	
	32	12	28	*	*	
質問4	12	62	*	*	*	
	6	66	*	*	*	
質問5	5	3	1	*	*	
	5	0	1	*	*	
質問6-1	26	31	5	*	*	
	35	30	1	*	*	
質問6-2	26	31	5	*	*	
	34	29	3	*	*	
質問6-3	14	23	25	*	*	
	11	25	30	*	*	
質問6-4	13	11	38	*	*	
	15	4	47	*	*	
質問6-5	26	29	4	3	*	
	33	30	2	1	*	
質問6-6①	33	28	1	*	*	
	32	28	6	*	*	
質問6-6②	27	27	8	*	*	
	31	25	10	*	*	

表3 続き

	ア	イ	ウ	エ	オ
質問 6-6③	32	29	1	*	*
	34	31	1	*	*
質問 6-6④	34	19	9	*	*
	28	22	16	*	*
質問 6-6⑤	27	34	1	*	*
	33	33	0	*	*
質問 6-6⑥	28	33	1	*	*
	34	32	0	*	*

「シャベル」「スコップ」という語を知らない学生はいないが、「スコップ」を語として使わないという学生が少数見られる。理由に「小さいころから「シャベル」と呼んでいたから」と記するものが多いが、その前提として「シャベル」と「スコップ」は同じものであるという認識があるように思う。さらに、「(「シャベル」に比べて)「スコップ」は一般的な言い方ではない」「(「スコップ」に比べて)「シャベル」の方が言いやすい」という理由をあげる者もいる。先に述べたように、この二語がたどりついた現代の用法が国語辞典の記述通りだとすれば、究極的にはむしろここで示された少数の回答はこの二語の将来を暗示しているように思う。

さて、質問3は発音の難易からみて、「スコップ」の語の方が習得が後であろうと予想したが、「スコップ」の語を先に習得したという学生も少なくない⁴⁾。質問4の使い分けについて、「区別しない」者が少数見られる。その理由(質問5)としてほとんどが「同じものだから」をあげる。一方大半は「区別している」と答えているが、その区別の仕方(質問6の1~6)が問題である。すなわち、その大小や柄の長短、使い方、具体的な用途について意見が真っ二つに分かれるのである。また、それぞれの答えがほぼ相互に関連しており、大体次のように分かれる⁵⁾。

A シャベルは形が大きく柄が長く、足をかけて使う。雪かきや工事現場で穴を掘る時に使う。スコップは形が小さく柄が短く、手で持って使う。犬のフンをとったり、子供が砂遊びをする時に使う。

B シャベルは形が小さく柄が短く、手で持って使う。犬のフンをとった

り、子供が砂遊びをする時に使う。スコップは形が大きく柄が長く、足をかけて使う。雪かきや工事現場で穴を掘る時に使う。

さて、国語辞典等の記述は、先に述べた通り、少なくとも「スコップ」に関しては A の立場で書かれているとあってよい。使用法や具体的用途等についてはふれないものも多いが、「大小」については大半 A の立場であり、それから類推すれば使用法や具体的用法も A と考えているとみてよいだろう。とすると、B と考える多くの回答は誤用によるものとみるべきであろうか。

実は、2.1 にあげた国語辞典の類の記述の中で「スコップ」について気になるものが二つの辞典にあった⁶⁾。(下線は筆者)

さじ形で、柄の長い大型のシャベル。(『角川国語大辞典』昭 57 初版・昭 61 第 3 版)

土や砂などを混ぜたり、すくったりする長さ 1m ほどのさじ状の道具。(三省堂『コンサイス外来語辞典・第 2 版』昭 51)

スコップについて、先述した B の立場で書かれたものである。さらに『大図典 view』(昭 59, 講談社)には、シャベルとスコップがそれぞれ写真入りで掲載されているが、「花壇の手入れや、子供の砂遊び用」と説明されている小型のものが「シャベル」とあり、幅広い刃が付いている大型のものが「スコップ」とある。国語辞典等の類でもこのような記述が見られるということは何を表すのか。もし、B を誤用と考えるならば、その誤用がかなり広範囲で行われていることを意味するのではないか。また、おおかたの国語辞典の記述に見られる A をよしとするには根拠があるのだろうか。やはり、この二語の原語の意味、そして日本語として定着した歴史について今振り返る必要がある。

3. 国語史から見た外来語「シャベル」と「スコップ」

3.1 原語の意味

さて、それではシャベル及びスコップは本来どのような道具をさしたのか。「シャベル」は英語 [shovel] を起源とする語であり、「スコップ」はオランダ語 [schop] を起源とする。その原語の意味は *THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY* (Second edition, 1989) (以下 OED と呼ぶ) によれば、シャベルとは鋤に似た道具で、その特徴として金属等の幅広い刃があること、また柄が付いていること、その用法として、土砂や穀物などをすくったり移動したりすることとある⁷⁾。特に大小については触れていないが、その用法からして

あまり小さいものは当らないと思われる。坂田俊策氏によれば「英語では、草花を移植したりするときに片手で握って用いる小型のものは trowel という。土砂などをすくって他の場所に移動するときに用いる、柄が長くて幅広の刃がついているものは shovel という。また、土を掘るときに、幅広の刀に片足をかけて踏み込んで用いるものは spade という」⁸⁾。

一方、オランダ語 schop は *K TENBRUGGENCATE ENGELS WOORDEN BOEK* (1974) によれば、英語の shovel, spade, scoop, trowel に当たるとある⁹⁾。

すなわち、原語の意味からは、「スコップ」は土砂などをすくう道具を広くさすのに対して「シャベル」はその用法が「スコップ」より狭いわけである。「スコップ」を特殊な「シャベル」と見る国語辞典の記述とは逆になるわけである。

3.2 外来語「シャベル」と「スコップ」の歴史

さて、この二語の日本への流入時期はオランダ語起源の「スコップ」の方が早いものと予想されるが、『コンサイス外来語辞典(第4版)』は、その時期を二語とも明治時代とし、『増補外来語辞典』(東京堂)では「シャベル」を明治時代、「スコップ」を江戸時代とする¹⁰⁾。

「シャベル」について、英和辞典の類ではすでに文化8年(1811)の『諳厄利亞興学小筌』に見られる¹¹⁾。

ハイル ショーフル

fire shovel 灰杓

メドハーストの『英和和英語彙集』(1830)やヘボンの『和英語林大成』(1867)には見えないが、さらに文久2年(1862)の『英和对訳袖珍辞書』にも見える¹²⁾。

shovel 大杓子の類

その後明治期の英和辞典『附音挿図 英和字彙』(明6)、『英和俗語辞典』(明9)、『増補訂正英和字彙第2版』(明15)に見え、それぞれ「鏟、火^{すき}通^{おまかき}」、「十能」、「火^{じゅうのう}鏟」と和訳されている¹³⁾。

一方「スコップ」は、天保4年(1833)に成立した『和蘭辞彙』に次のように見える。

schop 大杓子の類 土砂杯ヲヒフ

現代日本語の「小型のシャベル」としての「スコップ」ではなく、先の英和辞

書の見られた shovel と同じものをさしている。これより約 20 年前になった『蘭語譯撰』には、鋤の意味の spaade はあるが、schop は掲載されていない。

以上のことから、少なくとも原語が幕末に入ってきていることになる。そして、ともに「大杓子の類」と訳されているわけだから、同様のものと認識してよいだろう。

では、外来語「シャベル」「スコップ」として日本語の中で使用されたのはいつか。(現在の調査段階では) 文献の上で、「シャベル」が明治期に現れるのに対して、「スコップ」は大正期まで見えない。

「シャベル」の早い例として『角川外来語辞典』では、明治 2 年の福沢諭吉の『洋兵明鑑』(シャウエル) をあげる¹⁴⁾。同じ時期の例を管見では見出すことはできないが、「十能」でも「鋤」でもない、「土砂をすくったり掘ったりする」道具としてのシャベルが開国前後に流入し¹⁵⁾、工事・軍事など様々な方面で盛んに使われていたとすれば、明治のかなり早い時期にこの語が外来語として定着したとしてもおかしくない。

明治後半になると山田美妙の『日本大辞書』(1893) などの国語辞書をはじめ他の資料にも外来語としての「シャベル」が見えるようになる¹⁶⁾。

この時期の「シャベル」は、「主として膨軟の土砂をすくひ甲処より乙処に移すに使用す」(『農芸大辞林』) のように、先が丸形と思われる「鋤」系統のものと、「じぶのうニ似テ土など抄フモノ」(『日本大辞書』) のように、先が角形と思われる「十能」系統のものがあるようだが、ともに土砂などをすくう道具としての現代の「シャベル」とほぼ同じと考えてよい。

前に触れたように外来語「スコップ」が文献に見えるまでかなりの時間を要する。先の「シャベル」を掲載する、明治期の辞書『日本大辞書』『ことばの泉』『新式以呂波引節用辞典』『辞林』『大辞典』には、「スコップ」の掲載はない。さらに大正期の『新式辞典』(大正 1)、『大日本国語大辞典』(大正 4)、『廣辞林(初版)』(大正 14) にも「スコップ」は見えない。『角川外来語辞典』のあげる大正 2 年(1913) の『工業大辞書』の例が早い例であろうか。管見によれば大正半ば頃によくプロレタリア文学の作品にその用例をしばしば見るようになる。

それにしても明治以前に入ってきたと思われる「スコップ」の用例がなぜ大正期まで見られないのか。幕末から明治にかけて、蘭学から英学へとすばやく転身した日本の歴史を思えばオランダ語起源の「スコップ」が英語起源の「シャベル」に外来語としての地位を譲ったと見ることも不思議ではない。

が、「スコップ」は消え去ることなく、あたかも突然にその勢力を伸ばしていく。ちょうど『和蘭辞彙』の時代から約百年後の昭和初めには完全に外来語として定着し、国語辞典である、『平凡社大辞典』（昭和9）『辞苑』（昭和10）にようやく掲載され、『国民百科辞典』（昭和10）にも独立項目として採収されている。文献の上での空白期間、「スコップ」は専門的もしくは地域的に見て、ある特殊な世界で使われていた語であったのだろうか。残念ながら、今それを明らかにすることはできない。

ただ、この大正から昭和初期に見られる「スコップ」は次のように石炭（の類）をすくう道具としてもっぱら用いられることが多い。（下線は筆者）

- 青木はときどき、スコップで石炭を掬っては火床（ファネスルーム）の中へ投げ込んだ。（宮島資夫『老火夫』1921）
- 十一時になると、彼は自分の持場のボイラーの前に来て、スコップで石炭を釜の中へ投げ込んでいた。（宮島資夫『安全弁』1922）
- 昼間細長く延びた地下室に積み上げた石炭の山は、その前方より三分程その形を失っていた。シャキシャキと石炭仲仕がスコップを使う音…建物の内部から絶間なく、これも亦人間の創った機械の呻きが、そうしてボイラーの呻きが恐い勢で投げ出されていた。（岡下一郎『齒車』1923）
- 私はスコップをもった時、鉄道の火夫をしていた時の如く身構えた。それから石炭の代りに、練炭粉末を掬った。（岡下一郎『練炭にかぶれる』1924）
- 私は炭塊の中へスコップをがっちり突き刺した。（岩藤雪夫『ガトフ・フセクダア』1928）
- スコップががらがらと、石炭の山を滑って、見る間に小さくして行く。（前田河広一郎『アトランティック丸』1931）
- 石炭を掬うスコップが金床のように重い。（田中忠一郎『爆発』1931）

以上から、「スコップ」は石炭をエネルギーとして多量に用いる鉄道や製鉄などの工場に使われていた専門的な用語として用いられていた可能性が高い。では、その専門的用語としてなぜ蘭語「スコップ」が選ばれたのだろうか。

ところで、英語 scoop には「A variety of coal-box...; short for coal-scoop」(OED) の意がある¹⁷⁾。石炭掬いとしての英語 scoop がその物の渡来とともに国語の中に入り、それが何らかの原因で、古くからあって、ある社会（あるいは地域）に残存していた「スコップ」と結びついたと推定できないだろうか。ではその社会または地域とは？ その原因とは？ 疑問はまだまだ続くが、今はまだ解決することができない。この問題は後の機会にまた論ず

ることにする。

とにかく大正期半ばには「シャベル」「スコップ」ともに出揃った。で、その違いはあったのだろうか。それらが専門的に用いられる現場ではその違いははっきりしている。「シャベル」は土砂などを掘り又は掬うために工事現場等で人夫が用い¹⁸⁾、「スコップ」は石炭類を掬うために工場等で火夫が用いる。

一方ですでにそれぞれの意味領域を侵しつつある。(下線は筆者)

●火夫は、夏の真夜中に、ボイラーの柄の長いシャベルを使うときよりも、汗をびっしょりかいて、足元さえ頼りなくなっていた。(小林多喜二『蟹工船』1926)

●俺はスコップで穴を掘る真似をして、働かして貰い度いものだという意味を通じた。

(里村欣三『苦力頭の表情』1926)

また「スコップ」の省略形「スコ」はむしろ土砂を掘る道具として使われている。(下線は筆者)

●黒砂糖色の顎骨と咽喉笛の飛び出た、数十人の苦力と百姓がドシドシとスコを揮っていた。(伊藤永之介『万宝山』1931)

●仕事は道路のネボリであった。俺はシャツ一枚になってスコを振った。(里村欣三『苦力頭の表情』1926)

これは特に日本の近代化と密接な繋がりを持つ「スコップ」の大躍進を意味すると見てよいのではないか。そして、このあたりの「スコップ」の語としての使い方が実は現在の混乱と関連するのではないだろうか。

ところで、現代語の辞書等に見られる、「シャベル」が大で「スコップ」が小という記述はいつごろの辞書から見ることができるのか。「シャベル」に関しては明治期よりすでに「大」という記述が見える。(下線は筆者)

土など抄ふ器。形、じふのうに似て、それより大なり。(『ことばの泉』1898)

同様な記述が『新式以呂波引節用辞典』(1905)や『辞林』(1911)にもあり、大正期の『大日本国語辞典』(1915)や『廣辞林(初版)』(1925)さらに昭和30年前後の『辞苑』(1935)・『広辞苑(初版)』(1955)にも受け継がれている。また、柄の長さについては『大辞典』(1912)に「三尺ホドノ木柄ヲ添ヘタモノ」とある。

が、用例としては次のようなものも見える。(下線は筆者)

●小さなショベルですくって (寺田寅彦『蓑虫と蜘蛛』1922)

・娘と二人で使ふ一つの小さなシャベルは土深く根を埋めてゐるこの花を球根から掘り採るには一寸努力を要した。(五所平之助「ひがん花」1951)

一方「スコップ」が小型という記述は(「辞書」そのものに掲載されたのが昭和期以降であるためか)なかなか出てこない。

ところで、昭和10年の『国民百科辞典』(富山房)には次のようにある。

・スコップ [(英) scoop] (下線は筆者)

粉状・砂状・粒状・小塊物等ヲ掬ヒ上げ或ハ混和用ニ使用スル匙形ノ鋤ノ一種。處理物ノ形態、及び単位重量ニヨリ大小アルガ、要スルニ片手デ柄ノ末端ヲ握リ一方ノ手デ柄ノ中央ヲ支へ自由ニ活動デキル程度ノモノデアルガ、之ガ使用ニ当リ能率ノ増進ヲ望ムモノナラバ形状・大サ・柄ノ長サ等ハ處理物ニ応ジ一考ヲ要スルモノデアル。

すなわち、「スコップ」は傍線のようにその対象物によって大小があり、(この時点で)今後目的に応じ改良される可能性があることがわかる。従って、大なるものを「シャベル」と呼ぶ以上、大も小もある「スコップ」が特に小型のものに限定されていくことを予想させる記述である。ここでOEDのscoopを見てみると、2に次のようにある。

A kind of shovel (varying greatly in size and shape according to its special purpose), used for dipping out or shovelling up and carrying materials of a loose nature; usually an implement of iron, tin, etc. with a short handle and a broad, concave, or curved blade, the part of which next the handle is often covered over to form a receptacle for the material scooped up. (下線は筆者)

前述の『国民百科辞典』の記述同様、対象物によって形状大小さまざまである等の記述があるが、下線の部分に注意したい。ふつう「短い柄」を持つとある。

おそらく直接的には「移植ごて」を「スコップ」と呼んだことから「スコップ」を「小型」と記述するようになったと推定されるが、英語 trowel が使われず、「スコップ」と呼んだのはこの scoop が関連するかもしれない。なお、移植ごてを「スコップ」と呼んだのはいつ頃か、なぜ広まったのか等の点については後の機会に述べたい。

4. 終わりに

さて、2の現代の国語辞典類の記述には歴史的に見ても妥当であろうこと

がわかった。そして一方で、現実の場面では(文献の用例から想像して)この二語の混同がかなり前から常に存在していた。辞書の記述を仮に正とすれば、アンケート調査では誤用もまた正用と同じ位広まっている。これは地域的なものに関わるのだろうか。真田信治氏の「シャベル」の方言分布の地図を見ると、「シャベル」を「スコップなど」と呼ぶ地域がどちらかという西日本に片寄っているようだ¹⁹⁾。このあたりに混同の鍵があるのかもしれないが、今回のアンケート調査からは地域的な片寄りは見られなかった。というより、神奈川・東京以外の出身者が少ないので傾向が表れなかったともいえよう。

では、今後この混同の状態がどう変わっていくか。辞書と反対のとらえ方をした見解が広がっていくのだろうか。そして、誤用が定着して本来の使い方をくつがえし、辞書の記述の書き替えが迫られるのだろうか。今その勢いを感じないでもない。だが、「スコップ」の語史を考えると、そう単純にはいかないように思う。すなわち、常に特殊な道具として——「石炭掬い」あるいは「移植ごて」として——使用されたことが、この語の存続につながってきたように思われる。しかし、すでに3で述べたように必ずといっていいほど、その特殊な領域が「シャベル」によって侵されていく。アンケートの中で少数の回答であるが気になるものがあった。まず、「シャベル」の語を使わない学生はいないが、「スコップ」なる語を知らない学生が1人だけだが存在すること、そして知っていながら「スコップ」を使わないという学生が全体の9%存在することである。その理由として「聞き慣れない」「最近では使う人が少ない」ことをあげる。その前提には「シャベル」=「スコップ」という意識があることはいうまでもない。まだ少数回答ではあるが、この事実が「スコップ」の遠い将来を暗示しているのではないか。

すなわち、何か非常に便利な道具が開発され、それを特に「スコップ」と呼び、消費者の間で大ヒットしない限り、「スコップ」の将来はないのではないか。混同の状態を経るいずれは「シャベル」に吸収され、極めて専門的な世界では残存したとしても、一般の社会では消えて行く語なのではないだろうか。大胆にもこんな予測を最後に試みた。大方の叱正をお願いする次第である。

注

- 1) 刃先についてふれたものは少ないが、他に次のような例がある。
「…本来、スコップは刀先が平らで、シャベルよりは深みがあり、石炭や鉱石などをすくうのに用いられるものをいう」(『平凡社大百科辞典』)
「シャベルとスコップはよく混同されるが、スコップは刃先がなく、全体に深く

- 丸みがついているのが普通。」(『外来語の語源』・角川小辞典 26)
- 2) なお, t の『増補外来語辞典』に「鉄製」とあるが(同辞典の「シャベル」の記述にはない)これは「スコップ」の特色と言えるかどうか。ちなみに, 『デイリー・コンサイス外来語辞典』には「シャベル」に「大きじ。土砂をすくうのに使う鉄製の器具(「スコップ」の項目はなし)とある。
 - 3) 国語辞典でも, 『国語大辞典言泉』(昭 61・小学館)のように, 「シャベル」について「ふつう, スコップより大きなものをいう」と記述する場合も見られる。また『コンサイス外来語辞典・第4版』の「シャベル」の項目には「スコップと同じであるが, シャベルは大形のものまで含む」とある。
 - 4) この学生たちの出身地は2年生は新潟 1 京都 1 神奈川 3 東京 5 大阪 1 福岡 1 で, 1年生は神奈川 5 愛知 1 兵庫 1 滋賀 1 高知 1 であるが, 全員が質問 6 で「シャベル」が大きくて「スコップ」は小さい, また 1 人を除いて「子供が砂遊びをする」のは「スコップ」と答えている。
 - 5) なお, 形の「丸みがあるか角ばっているか」については「どちらともいえない」という答えも多く, 区別の仕方との大きな関わりを指摘できない。材質についても同様である。「スコップ」をあえて「鉄製」とする『言葉に関する問答集 14』の結論とは大きく反するわけであるが, 本稿のアンケートの聞き方にも問題があるかと思われる。従って, 以上二点については以下の AB ではふれない。また, 具体的用法としてあげた「花壇の手入れをする」も, 例えば大きめの木を植える場合と小さな苗を植える場合も想定でき, その結果「どちらともいえない」という回答数が多かったと思われる。これも聞き方のミスである。「サツマイモを掘る」場合も同様なことが言えるかもしれない。よって, これら二点も上の AB から除いた。
 - 6) 『コンサイス外来語辞典第4版』の記述では, 問題の箇所は削られている。また, 「シャベル」については「土砂などをすくう道具」とあるだけで, 大小等については触れていない。
 - 7) A spade-like implement, consisting of a broad blade of metal or other material (more or less hollow and often with upturned sides), attached to a handle and used for raising and removing quantities of earth, grain, coal or other loose material.
 - 8) 「分野別カタカナ英語再点検(12) 園芸」(『時事英語研究』43 卷 12 号 1989. 3)
 - 9) shovel (ook voor kolen) spade (voor graan, meel, enz) scoop (kinder-schopje) spade (planteschopje) trowel (schommel)
 - 10) ただし, 「シャベル」と同義の「スコップ」についてである。「小型のシャベル」として使用されたのは明治時代としている。
 - 11) なお, 同じ編者の『諸厄利亜語林大成』(1814)には「shovel^{けり}とあるが, shovel の訳として奇異である。OED には, shovel の意味として「To make movements with the feet, without raising them from the ground to walk languidly or lazily」と記載されており, 足をひきずって歩く shuffle に近い意味で使われたことがわかるが, これに当るとは思えない。ところで, オランダ語 schop には動詞の用法として「蹴る」の意味がある。この辞書がオランダ人の指導によってなったことから, まず(道具としての)英語 shovel が(道具としての)蘭語 schop に蘭訳されたが, この schop には「蹴る」という意味があるので, それがそのまま和訳されたと考えられるのではないか。すなわち, 英語を蘭語訳したための誤まった和訳と思われる。

- 12) 『英和对訳袖珍辞書』にはスコップを語源とする「scoop」についても「大抄子」と記されている。
- 13) 吉沢典雄・石綿敏雄『外来語の語源』（角川小辞典 26）による。
- 14) これに先だって、万延元年（1860）の『ゑんぎり志ことば』（清水尚磨）、元治元年『英米通語』（清水卯三郎）に「ショウル」とあるという。（『角川外来語辞典』及び真田信治「地域とのかかわり—交通と通信の外来語」（『英米外来語の世界』昭56・南雲堂）による。
- 15) 『日本百科全書』（小学館）には「シャベル」の渡来について次のように記載されている。「…日本への渡来は開港前後と思われる。居留地の外国人が石炭の出し入れに用いたともいわれる。図示されたものとしては、黒船来航のようすを記録した絵巻のなかに、ペリーの将軍への献上品として数種みられる。国内生産としては一八九三年（明治二六）大阪堺の浅香久平が個人で、また二年後には兵庫三木で三木金物組合商会在が製造を開始したという。（以下略）」
- 16) 「シャベル」という形が定着するまでは「ショープル」「ショベル」「ショヴェル」「シャヴェル」「シャヴル」「シャブル」等多くの語形が存在した。とくに明治期は語形の種類が多い。なお、真田信治氏によれば、語史的には「ショ〜形」がまず出現した後「シャ〜形」が現れ、両形併用の中で「シャ〜形」が一般化したという。また、その方言形が「ショ〜形」は西日本に「シャ〜形」は東日本にという対立が見られるという。（『地域とのかかわり—交通と通信の外来語』（『英米外来語の世界』昭56・南雲堂）
- 17) なお、「スコップ」は「シャベル」と異なり多種の形は持たないが、ほぼ時期を同じくして英語 scoop を起源とする「スクープ」が文献に見える。最初の例は明治期のもので気になるところである。「スコップ」にはこの「スクープ」が何らかの形で介在している可能性がある。（下線は筆者）
- 此頃は日増しに土方の数を加へて、短い冬の日脚を、夕方から篝火を焚いて忙しさに工事を急いで居る。灯の影にうごめく黒い人影、罵り騒ぐ濁声（だみごえ）、十字鍬（つるはし）や、スクープや、ショープルの乱れた處は、宛然（まるで）戦争（いくさ）の後をまのあたり観るやうである。（白柳秀湖『駅夫日記』1907）
 - 尹は、終日、外へも出ずに、じっとしてストーヴの傍にしがみついていた。まるで、石炭燻べに備われたように、二度の食事を摂った以外には、人の出はいり毎に、石炭を小さなスクープで掬っては、火の中へ投げ込んだ（前田河広一郎『セムガ（鮭）』1929）
- また、昭和10年の『平凡社大辞典』には「スコップ」「スクープ」の両形が見え、「スクープ」の項に「①物を掬ひ取るに用ひる匙またはシャヴェル状の器具。我國にはスコップと訛稱す。」とある。
- 18) 「シャベル」の用例をあげておく。（下線は筆者）
- 新吉は砂山の下に篩をたてかけた。そしてシャベルで砂利をすくい上げて、篩の上の方に投げつける仕事をはじめた（宮島資夫『土方部屋』1920）
 - 彼はシャヴルで、セメント樹にセメントを量り込んだ。（葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』1926）
 - 九時の下り列車で鶴嘴やシャベルを持った線路工夫の一隊がどやどや到着した。（小堀甚二『避難線』1928）
- 19) 「地域とのかかわり—交通と通信の外来語」注14・16）参照